『古代アメリカ』18, 2015, pp.79-94

＜調査研究速報＞

金沢大学によるティカルプロジェクト（2012～2015）概要報告 (註 1)

中村　誠一
（金沢大学人間社会研究域附属 国際文化資源学研究センター）

はじめに ーティカル国立公園ー

ティカル国立公園は、グアテマラ北部ペテン県に位置しており、1979 年に世界第一号として世界複合遺産に登録された著名な場所である（図１）。約 576 平方キロの広さをもつティカル国立公園は、メキシコとグアテマラ国境を挟んでベリーズ近くまで続く、約 2 万平方キロを超す生物多様性を保持した「マヤ生物圏保護区」の中核地帯で、その中に最盛期マヤ文明の最大都市が眠っている（写真１、写真２）。現在のマヤ文明史の定説では、ティカルの北、メキシコ領に位置するカラクムルとティカルは、最盛期マヤ文明の歴史を決定づけた二大都市であったとされている。

図１ マヤ文明の世界遺産登録遺跡
（地図：NASA SRTM データを Kashmir 3 D で作図）

ティカルはマヤ文明の中心地であり、グアテマラという国の国民アイデンティティ統合の象徴でもあるために、国内外の様々なステークホルダーの利害が複雑に絡み合う地となっており、数多くの政治的及び社会的事象の台風の目となっている。ティカルの中核部でプロジェクトを興して実施していくための地ならしの活動開始は 2005 年に遡るが［中村 2007］、そのために準備過程で様々な障

写真１　ティカル遺跡の１号神殿（８世紀）

写真２　ティカル遺跡４号神殿からの景観

壁が出現し、10 年たってやっと本格的な活動が展開できるようになったところである [註 2)]。

以下では、金沢大学ティカルプロジェクトの活動を支える基盤施設の一つについて紹介したのち、3 つの主要活動（研修事業、草の根技術協力事業、考古学調査）を順に述べる。

１．ティカル国立公園文化遺産保存研究センター（CCIT）

写真 3　ティカル国立公園
文化遺産保存研究センター外観

ティカル国立公園文化遺産保存研究センター（CCIT）は、日本政府の文化無償資金協力によって 2012 年 7 月に完成し、正式にグアテマラ政府へ引き渡された（写真３）。CCIT に関する詳細は既に報告されているのでそれに譲るが[JICA/山下設計 2010; 中村 2013a]、筆者は 2005～2006 年にかけて、国際交流基金の派遣専門家として現地フィーザビリティ調査を実施し、その結果を受けて、このセンターの建設を両国政府に提言した。また、センターが実際に完成するまで、無償資金協力の実施機関である国際協力機構（JICA）の技術参与として、このセンター建設プロジェクトの予備調査団、基本設計調査団に加わり、施工中は JICA 派遣の専門家として学術的な監修を行った。

グアテマラのジャングルの中で行われる考古学プロジェクトで、このような施設を持つものは皆無である。確かに、外国の大学主導で考古学プロジェクトが実施されているうちは、掘立小屋のような施設であったとしても何とか学術資料を保存･保管し維持管理していくことができる。しかし、いったんプロジェクトが終了してしまうと、途端に保存・保管上の問題点が発生する事例は、2000 年代後半に終了したティカルでのスペイン開発庁の調査を含めて、数多く存在する。

ティカルのような熱帯雨林の中で大規模かつ長期的な学術調査を持続可能な形で続けていくためには、劣悪な環境の中でも調査員が健康を保ち、学術的な調査研究に専念できる「現代的な環境」を整えることが必要である。同時に、考古学的発掘調査によって回収される大量の学術資料を半永久的にきちんと保存処置し、保管できるしっかりとしたインフラ施設が必要不可欠である。この観点から、CCIT はティカルにおいて大規模かつ長期的な学術調査を展開する上での基盤施設となっている [註 3)]。

当初、CCIT 完成後には、グアテマラ、日本合同の運営委員会を組織して、ティカル国立公園側が作成する毎年の活動内容を査定し、この基盤施設で保存研究に加えて人材育成研修や大学間交流のための活動、国際的なセミナーやシンポジウムの開催、等を実施していく予定であった。しかし、建設過程の最後にグアテマラで政権交代があったために、当初考えられていたセンターの活用・運営法を、組織的な「体制」として確立するに至らず、当初計画と現状での利用実態には乖離があることは否定できない。しかしながら、それでもなお、この CCIT は、現地ティカル国立公園スタッフの活動拠点として、また金沢大学の総合的なティカルプロジェクトの現地拠点の一つとして立派に機能しており、全人類にとっての貴重な財産である世界複合遺産「ティカル国立公園」の資源としての保存と活用に貢献するための施設という当初の目的を果たしている。

２．ティカルプロジェクトの 3 つの主要活動

2-1. JICA 連携事業：「地域資源としてのマヤ文明遺跡の保存と活用」研修

2010 年頃から、グアテマラの JICA 事務所と話合いをもちつつ、マヤ文明の遺跡を有する国々を対象とする広域的な活動計画を立案しようとした。その結果、広域的研修計画を立案し JICA に提案、金沢大学人間社会研究域の国際文化資源学研究センターとして、2012 年に JICA 課題別研修「地域資源としてのマヤ文明遺跡の保存と活用」（2013～2015 年）を受託した。中米の国々は、ともすれば自国のマヤ遺跡こそ最高・最上のものであると考える狭いナショナリズムに陥って、他国の事例を参考にせず、独自の調査・修復保存・管理運営法をそれぞれのマヤ遺跡に適用する傾向にある。そこでこの研修は、各国のマヤ遺跡の保存と活用上の問題点や地域住民との関係上の課題をお互いに共有しつつ情報交換し、域内の協力連携ネットワークづくりを行うことを目的として企画された。第三者である我々日本人、日本の大学が、各国のプライドを尊重しつつ複数国の間に入り、交流の仲介をする。そしてマヤ遺跡を文化資源と位置付けて、保存しつつ観光開発や地域開発に活用できるようにするための方策を皆で考え、各国政府の政策の中に実際に位置づけようと試みるのである。事前の意向調査で、本研修参加国は、まだ遺跡の保存と活用に関する政策が国内で十分に出来上がっていないグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドルの 3 ヶ国となった。そのため、研修はすべてスペイン語で行うことを原則とし、参加研修員は各国の文化遺産管理や観光開発政策を担う行政官僚から、その国を代表する遺跡の調査・修復責任者、地元自治体や地域住民組織の代表など、十分な行政経験、調査経験を有するベテランと将来性豊かな若手を組み合わせ選考した。人選にあたっては、筆者自らが現地での人脈を最大限活かしつつ、独自にピックアップした候補者グループと現地で事前面接を行って、最終的な研修参加者を決定し、各国 JICA 事務所と現地政府に推薦した。筆者自身の人脈があまりないエルサルバドルに関しては、現地 JICA 事務所や現地に勤務されている本会会員の柴田潮音氏に推薦を依頼した。

本邦研修は毎年 10 月～11 月に日本で行われ、2013 年度は 3 ヶ国から計 8 人、2014 年度は計 7 人が参加し、2015 年度は JICA グアテマラ事務所の現地職員を含む計 11 人が参加した [註 4]。この研修が通常の JICA 研修と大きく異なる点は、通常の JICA 研修が日本での研修だけであるのに対して、本研修コースでは約 1 ヶ月間におよぶ金沢大学および近郊での本邦研修のあと、全員で現地へ渡り、2 週間にわたって在外補完研修を実施するという形をとる点である（写真４）。2014 年度までの 2 年間は、在外補完研修をティカル国立公園内の上記施設 CCIT を拠点として実施したが、2015 年度はグアテマラの大統領選挙の年にあたったため、ホンジュラスのコパンのマヤ遺跡で行うことになった [註 5]。

写真 4　金沢大学ティカルオフィスにおける研修の模様（2014 年度）

開発途上国から日本へ来て学ぶ研修は大きな意義を有するものの、中米の国々と日本では、社会的・経済的な差、文化に対する考え方や歴史的背景の差、住民意識の差が激しく、日本で見聞し学んだ点をそ

のまま自国の事例に適用できない場合も多い。その日本研修の問題点をできる限り緩和するために、いったん中米の代表的な世界遺産での研修を間に挟むことで研修参加生が中米の現実への着地を図ろうと企画したのである。「中米」といっても、グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドルの 3 ヶ国ではそれぞれの実情が異なることはもちろんだが、このような形をとることで、少なくとも自国の実情に近い事例で学ぶことができる。

さらにこの在外研修のもう一つの特徴は、予算の関係で本邦研修に招聘できない人材をその２週間だけでも招待したり、翌年度研修の候補者をあらかじめ選び出し、翌年度研修へとつなげる予備参加としたりしている点にもある。

こうして、各国からの研修参加生は、本研修の最大の目的であるマヤ文明の遺跡を有する国々の間で持続可能な協力連携ネットワークを構築すること、金沢大学がそのネットワークを持続的に機能させるための触媒となっていくこと、という目的の達成に貢献しつつある。2014 年度研修参加生のイニシアティブにより、3 ヶ国国境地帯の街グアテマラのエスキプーラスで 2015 年 2 月に実施された 3 ヶ国国境地帯共同観光開発会議（Plan Trifinio）へのグアテマラとホンジュラス研修参加生の参加は、そのよい事例である。研修生たちは、本邦研修の期間内に本研修終了後自国で実施するべきアクションプラン（註 6）の第一校を作るが、それを在外補完研修期間に新たな研修参加生とも議論しつつ、最終校として完成させ、アクションプランを現地政府代表としてマスコミを通して発表することで研修の幕を閉じる。もちろん二年次からは、前年度のアクションプランの進捗状況も日本での研修期間にお互いにチェックしていくが、こういったアクションプランを他の JICA 連携事業として実施することで、より大きな相乗効果を生み出している（註 7）。

一方、この研修事業の課題としては、しっかりした経費に裏付けられた今後の持続性や発展可能性が保証されていない点がある。この研修事業には、ちょうど科研費の基盤研究 A と S の中間程度の額の資金を JICA から 3 年間つけてもらっているが、2015 年度で第一期が終わる。JICA を通してこの種の事業を継続しようとすると、どうしても文化遺産の「保存」ではなく観光による「活用」面だけに力点が置かれる傾向がある。「保護」「保存」という言葉を使うと企画がなかなか通らないが、「観光」や「開発」では通り安いというような点である。また、中南米くらいならまだしも、あまりに各国の実情が違いすぎる世界各地から多くの研修生を呼んで、日本国内だけで英語研修を行う方法が主流という問題点もある。

筆者の考えでは「保存」と「活用」を分けて考えることはできず、この二つは車の両輪であり、どちらがかけても文化は資源にならず開発にもつながらない。たとえば、観光政策を扱う研修は、必ずその資源の保存政策に関してもしっかり取り扱うべきであると思うし、日本での観光研修が観光見学になってしまっては本末転倒である。今後は、真に役に立つ実践研修を行うために、現地側と大学側の独自資金も適宜投入しながら、一方のステークホルダーである JICA と地道に交渉しつつ連携し事業発展を図っていきたい。

2-2. JICA 連携事業：世界遺産の活用を通した住民の生活向上支援

上記の課題別研修における 2013 年度グアテマラ研修生のアクションプランの一部を改良しプロジェクト化して組み立てたのが、草の根技術協力事業「世界複合遺産ティカル国立公園を活用した住民の生活向上支援プロジェクト」（2014～2017 年）である。この事業が企画・実施に至ったのは

次のような経緯による。

ティカル国立公園は、それまで国立公園の南側外縁部に位置する小さな3つの村落（北から順にソコツァル、エル・ポルベニール、エル・カオバ）の住民たちとほとんど関係を持っていなかった（図 2)。ティカル国立公園を訪れる年間訪問客はおよそ 20 万人に上り、グアテマラの首都近郊にある同じ世界遺産である「アンティグア・グアテマラ」につぐ国内第二の文化観光地であるが、それが存在するペテン県は、グアテマラ国内の貧困県の一つである［JICA・山下設計 2010］。ティカルを訪問する国内外からの観光客は、ペテン県の県都であるフローレス及びその対岸に建設されたムンド・マヤ国際空港から、64 キロにわたって延びるティカル国立公園への唯一のアクセス道路を通ってティカル遺跡中心部に通い、丸一日かけて遺跡の一部を見学したのち、日帰りでフローレス近郊まで帰って来るパターンがほとんどである。このため、ティカル国立公園に隣接する村落住民は、そのサイクルに参加しない限り、ティカルというたぐいまれな文化資源を活用した観光開発から、ほとんど何の恩恵も得られない。事実、プロジェクトが開始前に 3 つの南部隣接村落を対象に行った住民の意識調査においても、すぐ近くにあるマヤ文明の世界遺産遺跡は自分たちの生活とは何のかかわりもないか、ほとんど関わりはない、と考える住民が少なからずいた。プロジェクト開始後、住民の無作為インタビューを定期的に繰り返し行っているが、村落からティカルがこれほど近いところにあるにもかかわらず、ティカル国立公園へ未だかつて行ったことのない住民が毎回必ず確認されている [註 8]。

策定プロジェクトはプロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM）と呼ばれる概要表 [註 9] にまとめられているが、こうした状況をかえるためにカウンターパートであるティカル国立公園と 4 つの活動計画を策定した。そのうち 3 つは、地域住民を対象とした各種技能研修の実施であり、残りの 1 つは村落の児童・生徒の遺跡訪問と野外授業である（写真 5)。

図 2　3 つの村落の位置

写真 5　CCIT での児童の訪問学習
（2014 年度）

地域住民を対象とした各種技能研修は、ティカル国立公園を活用し自分たちの生活向上とつなげていくための基礎的な技能を身につけることで、ティカルを自分たちの資源と認識してもらうことを狙っている。グアテマラの政府機関であるグアテマラ観光庁（INGUAT）や専門的職業訓練センター（INTECAP）と連携しつつ、観光ガイドの養成研修、地元に特徴的な自然資源や食材の利用も含む広い意味での「民芸品」製作を促進するための基礎的な技能研修、上述したティカル国立公園

の３つの隣接村落の女性を対象として、考古学的な発掘調査により出土した土器片、石器片等の考古遺物を清掃・整理・修復復元することを学ぶ技能研修の３つを定期的に実施中である。そしてもう１つの活動である児童・生徒の遺跡訪問では、ティカル国立公園の専門職員から CCIT で講義を受けたのち、一緒に遺跡の中心部をまわり遺跡に関する正しい知識を得てその重要性を学び、その保存継承の意義を知ることを目的としている。

この草の根プロジェクトの活動は各方面に大きな反響を呼んでおり、日本の新聞社や現地マスコミの現地取材も頻繁にうけている。(註 10) 特筆すべきは、この取り組みの話が広がるにつれて、Audubon, Wildlife Conservation Society といった国際的な NGO との連携に発展し、世界自然遺産でもあるティカル国立公園の自然面での観光潜在力を村落住民が活用できるように、新たに、当初予定にはなかったバードウォッチング･ガイド養成研修を企画し 2015 年に実施するに至った点があげられる。

一方、今後の課題としては、ティカルにおける草の根技術協力事業には、その実施予算としてちょうど科研費の基盤研究 A 程度の額の資金を JICA から 3 年間付けてもらっているが、これまで事業の実施をほぼ全面的にその資金に依存してきた点があげられる。現地側の将来的な自立性や今後の持続可能性を考えると、少しずつ改善はしてきているが、グアテマラ政府観光庁やグアテマラの民間財団も巻き込みながら、よりいっそう、事業実施における現地側資金の占める割合を増やしていく必要があるだろう。

2-3. 北のアクロポリスにおける考古学的調査

ティカル国立公園における 3 つ目の主要な活動は、考古学的調査活動である。しかし、世界複合遺産第一号のティカルの現状は､学術的発掘調査以前に 1956～1969 年のペンシルバニア大学博物館のプロジェクトで土中から発掘され、一部を補強・補修されただけでそのまま露出された建造物群の保存を最優先しなければならない状況であった［中村 2010］。このような状況はマヤ地域のいたるところにみられ、探検の 19 世紀、発掘の 20 世紀を経て、21 世紀のマヤ考古学が保存の世紀に突入していることは疑いがない。

ティカルは膨大な面積を有する巨大都市遺跡であり、修復・保存と一口にいっても、「保存」という概念すらなかった過去の考古学プロジェクトチームに放置された発掘トンネルの陥没による修復建造物の破損被害といったいわば人災から、3 号ピラミッド神殿への落雷による上部建造物の破損被害といった突然の天災まで、その問題は多種多様である。緊急に保存措置が必要な箇所も多数存在するが、その中でも特に緊急措置の必要な箇所の一つが「北のアクロポリス」と呼ばれている都市中核部であった。そこで、保存を念頭においた考古学的な発掘調査を行うこととし、当面の考古学調査の対象区域を北のアクロポリスに絞った。

活動はまず、2012 年以降、修復保存にも発掘調査にも必要となる北のアクロポリス（写真６、図３）を対象とする新たな地図製作から開始した。これはティカルで現存する地図がペンシルバニア大学博物館の時代のもので、現在の基準からみると正確性に欠けるためである［今泉 2013; 中村 2013b］。測量調査の終了後、2015 年にはペンシルバニア大学博物館のティカルプロジェクトで未調査であった北のアクロポリス北東部の発掘調査を開始した。この発掘調査の詳細な報告は別の機会に譲るが、ペンシルバニアチームが復元した北のアクロポリスの建築シークエンスにその初期から

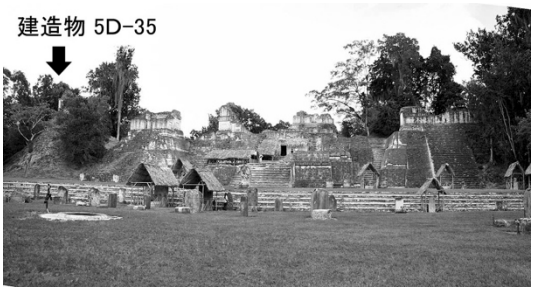

写真 6　北のアクロポリス

図 3　ティカル遺跡中心部平面図
（4km² の範囲）

現れ、北のアクロポリスの初期建築群をその上に載せる巨大プラットフォームが、4.5 メートル以上の高さを有していることが明らかになった。おそらく王朝初期の強大な権力者の指示のもと、一気に建築されたことを示す考古資料が得られている。2015 年の発掘溝は地表下 7.5 メートルの地点で技術的な問題から発掘を断念せざるを得なかったが、依然として、先古典期後期の土器が大量に出土していた。

別の発掘溝では、一部マスコミが報道したように(註11)、古典期前期の床面上に「パトリ」と呼ばれる古代のグラフィティ（刻線画）が彫られているのが確認された（写真７）。北のアクロポリスからも複数のパトリがペンシルバニア・ティカルプロジェクトで確認され報告されているが［Trik and Kampen 1983: Fig.41, Fig.45d］、保存され現存しているものは一つもない。これは、グアテマラの周辺遺跡でもほぼ同じような状況である［五木田 2015］。そこで、我々は、このパトリを正確に記録として残す傍ら、しっかりと後世に保存しつつ、同時に観光客に野外展示を通して鑑賞できるような方策を模索している。

写真 7　パトリ

３．金沢大ティカルプロジェクトの特徴と今後の展望

上述したように、金沢大学ティカルプロジェクトは、科学研究費補助金などの研究資金を使って、ティカルで単に学術調査を実施するプロジェクトではない。ティカル国立公園に関するできる限り多くのステークホルダーを巻き込みながら、世界遺産遺跡の保存と活用に関する様々な活動を実践していく広義の文化資源学プロジェクトである。我々が目指すところは、単に第三者的立場で他国の文化遺産や遺跡公園、博物館の現状を分析・論評して終わるのではなく、現地政府の責任機関や国際機関とともに実践活動を行って、現地で実際に起こっている諸問題の現実的な解決に寄与・貢献することである。すなわち、実践を通して、実社会の課題に関与するのであり、それは古代文明

を対象とする考古学/先史学分野でも例外ではありえない。

金沢大学では、「文化資源学」という用語を、世界各国・各地域の文化を、文化「遺産」、文化「財」という言葉についてまわる一義的な価値評価からいったん解き放ち、それが置かれた社会的コンテクストの中で新たな固有の価値を創造するための「文化資源」ととらえ直すことで、人類文化の総合的・多角的な研究と保護・活用法の開発を目指す新しい学問分野と定義している［金沢大学 2011］。さらに、全世界的にグローバル化が急速に進む中で、文化の違いはなくなるどころか一層その摩擦面が顕著になっており、異文化共存を実現するためには互いの違いを尊重するのみならず、お互いにとっての異文化の有用性を認識することが重要であると主張する。このように異文化の有用性を認識し活用することは、すでに世界遺産の観光利用や伝統薬物の薬品への応用、伝統工芸の最先端技術への応用などで始まっているが、特定のステークホルダーによる異文化の一方的な利用が、偏狭なナショナリズムを発生させたり、経済的な利益を一方的に収奪したりする問題も生じさせている。そこで、金沢大のプログラムでは、文化の違いも人類全体で共有するべき資源であり、その価値と有用性を評価する姿勢を涵養することが、グローバル社会における喫緊の課題であるとして、その現場における実践を重視している（註 12）。

こういった観点から、ティカル国立公園に関する様々なステークホルダー間に入って実施されている金沢大学のティカルプロジェクトには、グアテマラの官民双方から強い期待が表明され、最近では北のアクロポリスの発掘調査や保存修復のために、グアテマラ側の自己資金供与の申し出も寄せられるようになった。世界遺産であっても、まずはその世界遺産が存在する国・国民がきちんとそれらを調査、保存、管理するべきであるし、ティカルのような人類史を代表する巨大遺跡を対象とするプロジェクトは、単一資金では到底まかないきれるものではないことから、多様な資金形態が選択肢として存在することは好ましいことである。今後のプロジェクトの見通しとしては、投入資金の性格により、より一層、ティカル国立公園の持続可能な観光開発を目指す活動が重要視され、それと関連させる形で、北のアクロポリスの発掘調査や保存修復作業が、2016 年以降、大規模に展開される可能性がある。また、金沢大学とグアテマラ・サンカルロス大学およびグアテマラ・デルバジェ大学との間で、学生や教員間の幅広い学術交流を促進するために大学間交流協定が締結されたことから、今後一気に人材の交流が加速する可能性がある。しかし、そのような場合でも、あくまでも文化資源学的立場から、研修事業、草の根技術協力事業のパートナーである JICA との連携をたもちつつ、今後の活動を展開していきたいと考えている。

数年前に、グアテマラのある遺跡公園を 25 年ぶりくらいに訪問した際に、驚いたことがある。ここ 10 数年、大規模な学術調査が行われていたにもかかわらず、遺跡公園としては 25 年前とほとんど変化がなかったからである。遺跡への悪路は同じで根本的なインフラには何も変化はなく、文化資源的観点からマヤ遺跡公園の保存と活用を考え、周辺集落の住民の生活と考古学プロジェクトの活動を結び付けるという視点も見られず、我々とは活動方針が全く異なっているように思われた。

今や日本の国立大学法人の世界では、大学が３つのグループに分類され、本来、卓越した研究を行うための一つの手段であるべきはずの「外部資金獲得」が、他大学と競合し大学ランキングを上げるために完全に目的化してしまっている感がある。しかし、いくら巨額の外部資金を得たところで、はたしてこういった外部資金を使って学術研究に特化するだけで、30 年後、50 年後の次世代の人たちに評価される古代アメリカ研究の潮流を作り出せるのか、早急な価値判断は禁物だが本学会

の構成員も真摯に考えることが必要である。人文社会系学問のこれまでのありようが、国や社会から厳しい目にさらされている現在、古代アメリカを学問的対象として調査研究する行為が、我々研究者自身の自己満足に終わっていないか、我々の研究がどのように現代社会と結びつき、その課題の解決に貢献し、人々の期待に応えることができるのか、我々にも真剣に考えていくことが求められているのではなかろうか。

註

（註 1） 本報告は、筆者がサイバー大学より金沢大学に異動してから指揮してきたグアテマラ・ティカル国立公園における総合的なプロジェクトの 2015 年 9 月までの活動概要をまとめたものである。金沢大学ティカルプロジェクトは、JICA 委託事業費、科研費（JSPS KAKENHI Grant Number 26300026）、金沢大学超然プロジェクト資金等を使って実施されている。

（註 2） CCIT は、以下の施設及び機材によって構成されている（JICA/山下設計 2010）。

（施設）

収蔵部門（収蔵庫、収蔵展示室）、保存修復部門（ラボラトリー室、実演ラボ室、処置室等）、調査研究部門（スタジオ室、デジタル情報センター、調査機材庫室等）教育普及部門（視聴覚ホール、展示ロビー等）、管理部門（事務室、会議室、館長室、警備室、受付・案内、エントランスホール等）、共用部（通路・機械室等）

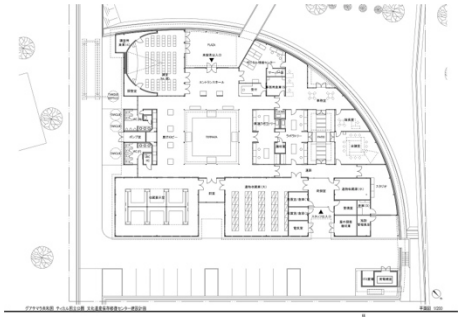

図 4　CCIT 平面図

（出典：JICA・山下設計 2010）

（機材）

文化財保存用機材、収蔵用機材、測量製図用機材、コンピュータ関連機材

（註 3） ティカル国立公園に関係したステークホルダーは多種多様であるが、そのうち、以下にカギ括弧で示すステークホルダー間でこれまで起こってきた主な摩擦・対立事例としては、「公園職員労働組合」と「グアテマラ文化スポーツ省文化自然遺産副省」や「ティカル国立公園」の間のティカル国立公園の度重なる占拠や頻発する労働ストライキの事例、「外国の大学」や「ティカル国立公園」主導のプロジェクトで働く労働者を「職員労働組合」が半強制的に推薦してくる事例、「グアテマラ文化スポーツ省文化自然遺産副省」と「ユネスコ」の間の世界遺産マネジメントを巡っての摩擦事例、本文中に出てくる CCIT の建設や使用、ティカルでの主導権を巡る「JICA、外務省を含む日本政府」と「スペイン開発庁を含むスペイン政府」の競合事例、「各国の大学」間のティカルでの主導権争いなど、があり、10 年間それらに巻き込まれながら活動準備をしてきた経緯がある。世界遺産のような巨大遺跡における考古学を含む学術調査を実施する際には、常にこのような政治的・社会的問題に巻き込まれながら、調査研究を行っていかざるをえないのがマヤ地域の現実である。

（註 4）2015 年度本邦研修の日程（案）

日付	時刻	研修内容・テーマ	場所
10/8(木)	午前	開講式	金沢大学
	午後	学長表敬訪問・意見交換/ 研修総合講義	
10/9(金)	終日	研修生によるジョブレポート発表・討論会	
10/10(土)	終日	金沢市内視察	金沢
10/11(日)	終日	金沢市内視察（埋蔵文化財センター）	
10/12(月・祝)			
10/13(火)	午前	金沢の文化財保護と活用	金沢大学
	午後	金沢の文化財行政のあゆみ	
10/14(水)	午前	金沢の歴史文化資産を活かしたまちづくり	
	午後	金沢市の観光戦略	
10/15(木)	午前	世界農業遺産と里山・里海プロジェクト	
	午後	世界遺産：五箇山合掌造り集落	
10/16(金)	終日	五箇山の世界遺産視察	五箇山
10/17(土)	終日	能登の農業遺産視察	能登
10/18(日)			
10/19(月)	終日	金沢市内視察	金沢
10/20(火)	終日	文化遺産保存と活用・国際協力（西アジア）	金沢大学
10/21(水)	終日	文化遺産保存と活用・国際協力（東南アジア）	
10/22(木)	終日	世界遺産の経済効果と文化遺産マネジメント	
10/23(金)	終日	文化遺産と観光	
10/24(土)			
10/25(日)	終日	東京の文化遺産保存と活用（江戸東京博物館）	東京
10/26(月)	終日	最先端技術を使った文化遺産のデジタルアーカイブ（凸版印刷）	
10/27(火)	終日	文化財保護と史跡整備（奈良文化財研究所）	奈良
10/28(水)	終日	奈良の文化遺産保存と活用	
10/29(木)	終日	京都の文化遺産保存行政と活用（金閣寺等）	京都
10/30(金)	終日	京都の文化遺産保存と活用（京都文化博物館、二条城）	
10/31(土)			
11/1(日)	終日	石川/金沢の伝統工芸体験	金沢
11/2(月)	終日	アクションプラン第一校に関する進捗発表・討論会（グループワーク）	金沢大学
11/3（火・祝）	終日		金沢
11/4(水)	終日		金沢大学
11/5(木)	午前	アクションプラン第一校発表/研修評価会	
	午後	閉講式	

（註 5）2015 年度ホンジュラス在外研修の日程（案）

日付	研修内容	研修場所
11/8（日）	サンペドロスーラ国際空港到着、コパンルイナスへ移動（バス）	移動
11/9（月）	開講式、国立人類学歴史学研究所コパン支部・コパンルイナス市役所表敬訪問 午後：コパン遺跡、セプルトゥーラス、博物館等視察	コパンルイナス
11/10（火）	コパン遺跡周辺プロジェクトサイト視察、周辺コミュニティ視察	コパンルイナス
11/11（水）	講義・演習	コパンルイナス
11/12（木）	講義・演習	コパンルイナス

日付	研修内容	研修場所
11/13（金）	リオ・アマリージョ遺跡、エル・プエンテ遺跡、周辺コミュニティ視察後、サンタロサ・デ・コパンへ移動（バス）	コパン県リオ・アマリージョ遺跡、エル・プエンテ遺跡と周辺コミュニティ
11/14（土）	サンタロサ・デ・コパンの取り組みを視察したのち、バスでレンピーラ県へ移動、レンカの伝統工芸品を活用したコミュニティ開発事業などを視察。のちサンタ・ロサ・デ・コパンへ戻る。	レンピーラ県の伝統工芸プロジェクトや文化遺産
11/15（日）	午前：バスでコパンルイナスへ帰着 午後：休日	コパンルイナス
11/16（月）	JICA ホンジュラス/金沢大学共催 「文化遺産と観光開発」国際セミナー	コパンルイナス
11/17（火）		
11/18（水）	国ごとのグループワーク	コパンルイナス
11/19（木）	午前：アクションプラン発表会／閉講式 午後：サンペドロスーラへ移動（バス）、サンペドロスーラ⇒テグシガルパ（空路）	コパンルイナス
11/20（金）	午前：JICA 事務所への研修成果報告 午後：研修生各自帰国	移動

（註 6）アクションプランとは、問題点を解決するための行動計画のことである。JICA のプロジェクトでは、プロジェクトの計画立案・実施・モニタリング・評価という一連のサイクルを一貫して管理する「一貫性」、現状の問題点を原因と結果の因果関係から明確に分析し、問題を解決するための手段を目的との関係から導き出す「論理性」、援助機関のみならずターゲットとなるグループを含めた様々なステークホルダーが、プロジェクトの計画立案の段階から参加して行う「参加型」の 3 つを特徴とする PCM（Project Cycle Management）手法によってアクションプランが作成される。

（註 7）アクションプランの一例として、以下、一部を示す。2013 年度のグアテマラからの研修生グループは、ティカルでの在外補完研修後の最終アクションプランとして「ティカル国立公園周辺コミュニティ開発のためのアクションプラン」を発表した。ここでは、コミュニティと関係して解決すべき問題点を 3 つあげ、それぞれ 5～6 のアクションプランを提示している。

このなかで問題点 1 として、「ティカル国立公園の職員たちが、ティカルの文化・自然遺産を保護・保全するために行っている取り組みや、ティカル国立公園という資源が、地域やコミュニティの開発にどのように役立ちうるのか、という点に関しての情報や展望が隣接コミュニティの住民と全く共有されていない」と指摘し、それを解決するためのアクションプランとして、「ティカル国立公園の遺産について、また、公園職員が文化・自然遺産の保護と継承のために行っている様々な技術活動について、隣接コミュニティの住民に認識してもらうためのワークショップを開催する」、「隣接コミュニティの子供から大人までを対象として、文化・自然遺産の保護についての教育プログラムを促進する」、「隣接コミュニティの児童・生徒にティカル国立公園の文化・自然遺産の価値を知ってもらうために、専門ガイドの案内による遺跡訪問を実施するとともに、ティカル国立公園の職員たちが資源の保全のために日々行っている活動を体験してもらう」など５つの活動を挙げてい

る。

また、解決すべき問題点 2 として「隣接コミュニティに固有の民芸品生産が全く欠如しているか、あってもその多様性がほとんどなく、少数グループである隣接コミュニティの住民にとって仕事の選択肢がほとんどない」と指摘し、そのためのアクションプランとして、「それぞれの隣接コミュニティに、どのような固有の民芸品を制作する潜在性があるかどうかを見極める」、「地域の自然遺産にネガティブな影響を与えない材質を使って行う固有の民芸品制作を奨励しつつ、その研修を実施する」、隣接コミュニティ住民の仕事の選択肢として、民芸品制作を補強するための研修プログラムを作成し実施する」など 6 つの活動を挙げている。

本文中でこの後説明される連携事業は、アクションプランのこれら条項をもとにプロジェクト化され、JICA の草の根技術協力事業の枠組みの中で実施することを申請されたものである。このように、JICA の異なった枠組みの協力を相互に関連付けて行っている実践活動はほとんど例がなく、研修事業で研修生たちが考え出したアクションプランを草の根事業で実践レベルまで引き上げうる点、草の根事業の対象となる隣接コミュニティの代表が別枠で実施されている研修事業に参加し、他国の研修生とともに学び交流できる点が、双方の事業にとっての大きな相乗効果といえる。

（註 8） 2014 年の 6 月～8 月にかけて 3 つの村落で行われた無作為面接式アンケート調査では、対象 79 人中 7 人がティカル国立公園へ行ったことがないと答えた。2014 年の 12 月および 2015 年の 3 月に行われた第 2 回目のアンケート調査でも、別の対象 79 人中 4 人がティカル国立公園へ行ったことがないと答えた。ティカルを知らないのは、ほとんどすべてが女性であり、中には小学校 6 年生や中学校 3 年生の児童生徒もいた。

一方、2014 年の 6 月～8 月の調査では、対象 79 人のうち 8 人がティカル国立公園は自分たちに何の利益ももたらさないと答えた。これが第 1 回目の調査時には 3 人と減少したが、すでに草の根事業が広く村落住民の間で知られるようになってきたことがその解答からうかがえた。

これらの詳細データは、グアテマラ人類学歴史学研究所の「モニュメント部」に提出され保管されているスペイン語報告書で見ることができる（Nakamura and Urizar n.d.a の p. 39, 41-42, 44-45, 47; Nakamura and Urizar n.d.b の p.7,11 等を参照のこと）。調査結果全体は、2016 年度に金沢大学からまとめて正式出版される予定である。

（註 9） 註 6 で示した PCM 手法でプロジェクトを一貫して管理するのに使われるプロジェクト概要表のことで、プロジェクトの目的や具体的な達成目標、そのためにどのような活動を行うのかを一覧表に示したものである。PDM（Project Design Matrix）は、プロジェクトの実施過程における成果と問題点のフィードバックにより、目的以外の項目は改訂されることもある。以下にこのプロジェクトの PDM を示す。

1. 事業名（事業実施期間） （Project Title/Duration）	**世界複合遺産「ティカル国立公園」の保存と活用を通した住民の生活向上支援プロジェクト（2014 年 5 月～2017 年 3 月）**
2. 事業実施団体名 （Name of Organization）	**国立大学法人金沢大学**
3. ターゲットグループ （Target Group）	**ティカル国立公園周辺コミュニティの住民**

プロジェクト要約 （Project Summary）	**指標** （Indicators）	**指標データ入手手段** （Means of Verification）	**外部条件** （Important Assumptions）
<u>上位目標（Overall Goal）</u> 世界複合遺産「ティカル国立公園」の文化資源と自然資源が永続的に保存・保護され、地域住民と共存的に発展する。			
<u>プロジェクト目標（Project Purpose）</u> ティカル国立公園周辺コミュニティの住民が、世界遺産を活用した生活向上のための仕事の基礎を身につける。	研修を受けた地域住民の●%が民芸品、文化・自然ガイド、遺跡の修復保存に関する仕事に従事する（男女別）	プロジェクトレポート 活動報告書、 インタビュー、アンケート調査	
<u>アウトプット（Output）</u> 1. 各対象村において世界遺産の観光客の関心を引く特徴のある民芸品制作が促進される。 2. 将来的に世界遺産の文化・自然ガイドとして働くための初歩的知識を身に付ける住民が養成される。 3. 地域住民が世界遺産の重要性を理解し、かつ遺跡の基本的な修復保存技術を獲得する。	地域住民により各村の特徴ある民芸品が販売される。 文化・自然に関する初歩的知識を身に付けた住民の数（男女別） 「野外体験教育」や遺跡の修復保存作業に参加した児童・親や地域住民の意識が変容する。 基本的な修復保存技術を獲得した住民の数（男女別）	プロジェクトレポート プロジェクトレポート インタビュー、アンケート調査 プロジェクトレポート	プロジェクトの活動に支障を与えるような自然災害が発生しないこと。

活動（Activities）	投入（Inputs）	
1-1　ティカルを利用した各村に特色ある民芸品作成のための資源調査を行う。 1-2　民芸品作成のアイディアについて、各村の地域住民と検討する。 1-3　地域住民に対し民芸品作成のための技能研修を定期的に実施する。 1-4　住民が作成した民芸品の展示の場を「文化遺産保存研究センター」に設ける。 1-5　国立公園の既存の施設内に観光客への販売スペースを設け、販売する。	日本側） 【人材】 プロジェクトマネージャー１名　金沢大学教授 国内調整員　２名　金沢大学 現地調整員　２名　金沢大学 【資機材】 検討中 現地側） 【人材】 プログラムリーダー　１名　ティカル国立公園 プログラムコーディネーター　１名　ティカル国立公園 公園技術スタッフ　１名　ティカル国立公園 【資機材】 文化遺産保存研究センター（研修場所・展示場）	・アウトプット達成に影響を与える阻害要因 **前提条件** （Pre-conditions） ・プロジェクト開始前に満たされるべき事柄
2-2　将来において文化ガイドの仕事を志望する住民に対し、基礎的研修を実施する。 2-3　将来において自然ガイドの仕事を志望する住民に対し、基礎的研修を実施する。		
3-1　地域の児童・親が文化遺産・自然遺産の重要性を理解するための「野外体験教育」を実施する。 3-2　地域住民に対し、ティカルでの修復保存作業への参加を通した遺跡の基礎的な修復保存の技能研修を実施する。		

（註 10）　新聞では、北陸中日新聞（2014 年 4 月 23 日）、北國新聞（2014 年 6 月 7 日）、毎日新聞北陸版（2014 年 6 月 8 日、2014 年 11 月 28 日）、朝日新聞石川版（2014 年 6 月 15 日）、等に掲載。雑誌では、JICA 広報誌 Mundi 2015 年 6 月号（No.21）に掲載。

（註 11）　2015 年 7 月 4 日の北國新聞に掲載。

（註 12）　金沢大学・博士課程教育リーディングプログラム「文化資源マネージャー養成プログラ

ム」パンフレットによる。文化資源マネージャー養成プログラムが育成を目指す人材は、「形態文化資源」「伝承文化資源」「文化資源情報学」に関する知識と国際的・総合的・学際的視野を備え、マネジメント能力、ファシリテート能力、ネットワーク形成能力を備えた文化資源マネージャーである。ティカルプロジェクトで行っている諸活動は、それらの能力を現地での実践活動を通して養成する場であるということができる。

参考文献

五木田まきは

2015　「マヤ地域における「パトリ」の文化資源化」古代アメリカ学会第 4 回西日本部会研究懇談会発表原稿。

今泉和也

2013　「遺跡地図再作成の必要性ーティカル遺跡における金沢大学主導プロジェクトによる測量調査ー」『古代アメリカ』第 16 号、73～83 頁。

国際協力機構（JICA）・山下設計

2010　『グアテマラ共和国ティカル国立公園文化遺産保存研究センター準備調査報告書』国際協力機構（JICA）、東京。http://libopac.jica.go.jp/images/report/P0000252799.html からダウンロード可能。

金沢大学国際文化資源学研究センター（編）

2011　『テキスト　文化資源学』金沢大学国際文化資源学研究センター

中村誠一

2007　「グアテマラ・ティカル国立公園の魅力」『チャスキ』No.35、6～11 頁。

2010　「マヤ文明世界遺産の調査と保存ーティカル遺跡の調査と保存に関する覚書（1）ー」『サイバー大学紀要』第 2 号（2009）、53～62 頁。

2013a　「マヤ文明世界遺産の遺跡マネジメントーティカル北のアクロポリスプロジェクトー」『文化遺産国際協力コンソーシアム　文化遺産国際協力事業紹介　2013March』12～13 頁。

2013b　「ティカル北のアクロポリスプロジェクト」『金沢大学文化資源学研究　第 13 号　ティカル北のアクロポリスプロジェクト報告（1）』、1～6 頁。

Nakamura, Seiichi and Alexander Urizar

n.d.a　*Resultados de la obtención de información necesaria para inicio de proyecto y elementos base de evaluación de avances.* Informe presentado a IDAEH, Octubre 2014. Ciudad de Guatemala, Guatemala.

n.d.b　*Resultados de la segunda encuesta realizada en las tres comunidades, en el marco del proyecto "Mejoramiento de sustento de vida y apoyo a los residentes de la comunidad a través de la preservación y utilización del Patrimonio Mundial Mixto "Parque Nacional Tikal" financiado por JICA.* Informe presentado a IDAEH, Marzo 2015. Ciudad de Guatemala, Guatemala.

Trik, Helen., and Michael Kampen
1983 *Tikal Report No.31 The Graffiti of Tikal.* The University Museum of Pennsylvania, Pennsylvania

原稿受領日　2015 年 9 月 25 日
原稿採択決定日　2015 年 10 月 12 日